

教室と寝室

——ドイツ学校物語論 1——

高 田 里恵子

ポルノ作家とエリート学校

何年か前の芥川賞受賞者の、受賞小説以外の（いまではこちらのほうがもっと重要らしい）売りものは、有名大学在学中であるということだったが、これが話題になったとき、過去の受賞者のうちで当時学生であった作家たちの名前も各新聞が競って掲載したものだ。その名前のなかに、東大国文学部大学院に在学中に『鯨神』（1962）という小説で芥川賞作家となった宇能鴻一郎が抜けていたのは、何か作為あつてのことなのだろうか。もちろん、宇能が芸術的良心と呼ばれるものを売りわたした堂々たる墮落者であることは間違いないようだが、ある種の疚しさは、しかし、まず誰よりも本人じしんがもっているのかもしれない。1982年の自筆年譜のなかで、例の「女性独白体」を駆使することで「少年時代からの官能への志向を、はじめて一般向きの流露感のある形で、表現できた」¹⁾と語る芥川賞作家から見えてくるのは、やや屈折した自負なのである。その「少年時代からの官能への志向」については、同じ年譜のなかで、やはりかつての新進学生作家の矜持をよみがえらせながら次のように説明されている。

高校は福岡県立修猷館。極めて自由な校風だった。運動に羞恥を覚え、体育はほとんど欠席した。とくになぜか集団体操及び行進に、非常な屈辱を

覚えた。これは性的な羞恥に極めて近かった。この体験から、個人と集団の合体感を性的なものとして捕えた作品を、いずれ書きたいと思っている²⁾。

だとすれば、宇能鴻一郎の一大発明による「女性独白体」ポルノ小説は、
ホモソーシャル
 同質的同性の集団行動に「性的な羞恥」を感じている作者にとっては、設定から言えば、実は性的なものから最も遠いということになる。「極めて自由な校風」のなかの、おそらく唯一の強制が、なぜかある種の官能と結びついていていたというのは、しかし、まったく理解できないことでもあるまい。性について自由に語っているかを見せて、このポルノ作家は自己の欲望の中心を隠蔽しているのだろうか。あるいは、あえて探しだされる唯一の共通点としてのサドマゾヒズムのほうが目にあたいするのかもしれない。受賞小説『鯨神』では、「女性独白体」どころか、野太い男性性が謳われているのだが、これも、宇能に性的羞恥を感じさせたものとは対立する（現在ではすっかり陳腐になってしまった）古層的民衆の異性愛世界に属する。

ここで、宇能鴻一郎の芥川賞受賞をめぐる、いや、学校と性的羞恥をめぐる、もう一つのエピソードを紹介しておこう。ただし、当拙論はポルノ作家を扱えるだけの度量をもっていないので、残念ながら宇能先生にはまもなくお引取り願わねばならぬが。

さて、問題のエピソードである。サルトルの訳者としても知られるフランス文学者平井啓之（当時東大教養学部助教授）は、宇能の芥川賞受賞の直後に「戦中派・ガム・学生作家——宇能鴻一郎氏の批判に答える」と題する文章を東大新聞（1962年4月4日号）に寄せている。これは、平井が宇能鴻一郎の次のような談話に答えて書いた文章だった。入学してから二、三度目のフランス語の授業で発音練習中にガムを噛んでいたことを若い教師に注意され、おまけにこの教師の同級生であった旧制第三高等学校の戦没学生たちの思い出話とともに「キイキイ声」で説教されたせいで、それ以後フランス語の授業に出る気をなくしてしまっただけでなく、「こんな尻の穴の小さい人

がいてと知って」東大というところにも大いに失望し、またフランス文学を信奉する日本の主流派的スノップや文化人どもに嫌悪感をもつようになった、と。「戦中派が何のために死のうが、それは私どもとは関係のないことで、私どもが勉強しなければならない理由づけには、どうしたってならない」³⁾。新・芥川賞作家の意気軒昂たる言葉を読みながら、平井は、くだんの「キイキイ声」というのはどうやら自分のことらしいと気づく。「宇能君よ、いい仕事をするがいい。君にとってはどうであろうと、あのときのチューインガム学生がいい仕事を重ねてゆくことはぼくにとっては楽しいことなのだから」⁴⁾ という平井の結びの一文は、このエッセイが単行本に再録された1983年には、いくぶん復讐心の混じった皮肉に思えてくる。

昭和9（1934）年生まれの宇能鴻一郎は、同じく東大文学部出身の芥川賞作家を挙げるなら大江健三郎や柴田翔らと同学年の、戦い死ぬことに「遅れてきた青年」であり、また国民学校生徒として、終戦を機にした大人たちの豹変に直面し傷ついた反抗の世代ということになるだろう。ノーベル賞作家が文学の世界で表現したことを、宇能青年は実生活で、というよりエリート学校の狭い教室のなかで図式的なほどあからさまに表明したわけである。

教師は、戦時中にフランス語を選択する行為が、いかに「世間の風潮に逆らった」勇気ある行動であったかを力説し、君たちのように「男女共学」のもとに自由に学びうる「民主主義教育」に感謝せよ、と諭した⁵⁾。ところが、「遅れてきた青年」のほうは正反対に取ったのである。「わだつみ大学教師」の語る軍隊や学徒動員をめぐる悲しい言葉は、ハズレ者意識を誇りとするらしいチューインガム東大生には、かえって、旧制高校という同質集団の特権的悲劇性にたいする反発（と嫉妬）を感じさせたことは想像に難くない。

さらに一步進んで、この場所にも「個人と集団の合体感を性的なものとして捕え」、そこに「性的な羞恥」（と欲望）を感じる宇能鴻一郎を見いだすならば、あまりにも穿ちすぎというものだろうか。それとも、話が、表題に掲げたドイツの学校小説、百年前の世紀転換期に大量に書かれた学校小説から、ずいぶんずれてしまったように見えるだろうか。だが、我がポルノ作家の性

的告白とチューインガム・エピソードもまた、学校、しかもドイツの学校小説と同様にエリート学校を舞台としている。ただし、宇能のエリート学校はいつでも「極めて自由な校風」であり、彼に「性的な羞恥」（と欲望）を覚えさせるという、同性同質集団の圧迫は（残念ながら）めったに登場してくれなかったが、しかし、これこそが世紀転換期のドイツ帝国においては批判的に（魅力的に）描かれたものなのであった。人気ポルノ作家が気づいていながら、いまだ書くことができない事柄、つまり、同性集団の学校的な行動がさまざまな性の色彩をもってしまうということ、それがファシズムやサドマゾヒズム（の魅力）とも関係していること、それは、とりあえずポルノ小説とは無縁なわれわれにも何となく納得できるではないか。

教育・階級・ホモエロティシズム

世紀転換期の学校小説の典型例であるヘルマン・ヘッセの『車輪の下』（1906）は、我が国では一般読者にもよく読まれているので、学校批判という視点はすぐに理解されるにちがいない。画一的な学校教育に潰される秀才の悲劇を描く（と、さしあたり言うておく）『車輪の下』が、中学や高校の感想文課題図書となるのは、日本の学校の自己批判癖か、あるいは過大自己評価のどちらかのあらわれであろう。

もっとも、学校批判などという真正面からの話は重要すぎてすこし退屈にも思える。さらにつまらなく、また悪い意味で通俗的なのは、『車輪の下』がもつホモエロティックな雰囲気、学校批判以上に、一般読者とりわけ女性読者を魅きつけているのだというような言説である。これは、先ほどから述べている性的なものとも関連している。いままで同性集団という言葉を使ってきたが、男性集団を指しているのは言うまでもない。エリート上級学校はかつて男性の特権物であったが、それゆえに逆説的に、上級学校という舞台、そこでの男性間のホモエロティシズム（同性間の愛着）が女性好みの設定であることは、少女漫画研究に教えてもらわなくても、直感で分かるだろう（だから宇能先生が長年あたためているテーマに取りくんだならば、新たな

読者層を獲得すると断言できる)。『車輪の下』の日本的受容からも明らかなのは、同性同質集団の圧迫とホモエロティックな雰囲気とが同じメダルの裏表の関係をもつことである。

そもそもホモエロティシズムは、ヘッセの作品に限らず、かなりの振幅があるとはいえ、男女共学以前の時代における学校物語の最大の特徴であり、それは近代日本の作品にも当てはまる。たとえば『坊っちゃん』(1906、つまり『車輪の下』と同年に発表された小説なのだ)⁶⁾や『キタ・セクスアリス』(1909)も、学校を主たる舞台としている点ですでに立派な学校小説であるが、両文豪によって書きこまれた男色的精神(の讃歌)については夙に指摘されているところである。大正・昭和前期に少女たちに読まれた吉屋信子の小説における「エス」もまた、よく知られたテーマであろう。そして、こうした近代日本の場合を見ても分かるが、ヨーロッパの場合でも、この上級学校のホモエロティシズムは、つねに中産階級以上の階級と結びついている⁷⁾。

ただし、これもよく言われるように(言われていることをそのまま受けいれれば)、西洋市民社会は近代日本よりもホモフォビア(同性愛恐怖)の強い社会であったという。だとすると、学校物語という舞台は、学校がモラトリアムの場所であることに対応するかのようになり、ホモエロティシズムを、いつときだけ公然と表現してよい場所だったことになる。ついでなので『車輪の下』から例を挙げておくと、主人公の少年ふたりが寄宿舍の薄暗い共同寝室でキスをする場面の直後に、語り手はこうコメントしているのだ。「こういうささやかなシーンを目撃した大人がいたならば、そこに静かな喜びを感じたことだろう」⁸⁾。つまり、同性間の秘やかな接触も、大人から見ればほほえましい思春期の一情景にすぎなくなる、と念を押しているのである。先ほど「つまらない」と言ったのは、このように公然と描かれたものを特徴として提示してみせても仕方あるまい、という意味での発言である。流行のクィア・リーディングというのが、作品のなかに、抑圧されている同性愛志向を探りだし、そうした抑圧を強いる家父長制社会が抱えるホモフォビアやミソ

ジニー（女性嫌悪）を摘発する作業であるならば、われわれは、むしろここで、逆クィア・リーディングとでも言うべき方法を探るしかないような気すらするではないか。

そのクィア理論の最も重要な成果を提出するイヴ・セジウィックは、男性のホモエロティックな欲望（彼女じしんの言葉を使えば「ホモソーシャル・スペクトルの最もエロスに近い極」）が、19世紀のイギリスでは、階級によって、それぞれ違うものと結びつけられていたと言う。上流貴族階級においては、それは放蕩と、労働者階級においては暴力と、そして両者の中間に位置する知的中産階級（すなわちパブリックスクール出身者たち）では、^{エデュケイティッドミドルクラス}
^{スクールボーイデザイナー}生徒の欲望、つまりやがては必ず克服される子供っぽい感情と関連づけられている、と（先ほどの『車輪の下』の例をもう一度思い起こされたい）。パブリックスクール時代には、同性愛と地続きの男同士の友情を謳歌し、大人になってからはホモフォビアをもつようになるという二段階の過程を、セジウィックはこの知的中産階級の特徴として挙げるのである⁹⁾。それは、この階級の男性が家長として父権制の頂点に組みこまれるのが、たいへん遅いということと対応している。教育期間の延長と、高等教育にふさわしい知的職業に就くまでの修業期間の長さが、モラトリアムとしての思春期の誕生どころか、その異常な継続をもたらすというわけである。こうした状況は、近代産業社会全般に当てはまるだろうし、近代日本も例外ではない。

それにしても、セジウィックの考察は重要である。読者に「文学的」に映る、上級学校におけるホモエロティシズムが、ある種の知的および生活的余裕と結びついている事実には、すでに触れておいた。旧制第一高等学校という背景があってはじめて、『燃ゆる頬』（1932）や『草の花』（1954）の世界が（読者にとって）現出するのである。三島由紀夫や折口信夫のホモセクシュアリティ（同性間の性的感情）もその特権階級的雰囲気抜きにしては（読者にとって）成立しえないこと、それにたいして『蟹工船』（1929）が描く同性間の行為が悲惨な暴力以外の何ものでもないことを、ここでもう一度確認しておきたい。そしてこの確認とともに、逆に、われわれが学校物語とし

て選択する作品が、階級や知性や学歴という特権的バイアスのかかったイヤラシイものであることを断っておく。その意味で、たとえば『青い山脈』や「中学生日記」や「金八先生」は学校を舞台にしている、学校物語ではない。

さらに注目すべきセジウィックの指摘は、この知的中産階級とイギリス的もしくは近代社会的な男らしさの成立との関係である。世襲や家柄に根拠をもつわけではなく、自由だが不安定で曖昧なこの新興階級に輪郭を与えてくれるのが、男らしさの規範であった¹⁰⁾。そのような「男」は、男女の役割分担を明確にし、自分の特権的領域から女性的と見なされるものを排除して男同士の紐帯をより堅固にすることで鑄造されるだろう。ここに、女の世界であるブルジョア核家族と、男の知的訓練場（すなわち学校）や知的職場とが分離し、より重要なことには、それが最上の形態として寿がれる。つまり、封建的家父長制に対して近代的家父長制と呼ばれるものが成立するわけだが¹¹⁾、それは、夫が社会のなかである程度の地位（肉体ではなく、「男性的」学歴と知力に基づく職業）と収入をもち、妻が外で働かずに主婦でいられることを意味する。現在では性差別の根源のように糾弾される状況だが、それはともかくとして、ここではまず、男らしさとエリート学校とそこに通えるだけの経済力、そして性分業に基づくブルジョア社会の構造との連関を心にとめておきたい。性分業が曖昧になってしまうと困るのは、知的職業の夫たち（とそういう男性を尊敬する妻）であった。

ジョージ・モッセは、こうした男らしさの規範について、19世紀から20世紀初めのドイツとイギリスとで多くの類似点が観察されるというが¹²⁾、その理由は、両方の国において、近代の男らしさが知的中産階級（ドイツの場合は教養市民層と呼ばれる）の規範と結びついていたことに在る。「真の男らしさが、ドイツで『教養』として理解されるものの目標となった」¹³⁾。したがって、男らしさとは、腕力や粗野や金力ではなく、知力や決断力、自己犠牲や自己規律であり、それは教育の場で、選ばれた少年たちに叩き込まれることになる。ギムナジウムやパブリックスクール、そして我が旧制高等学校

の教育方針であった。繰りかえし言えば、こうした学校的男らしさの規範（宇能鴻一郎はこれに反発と魅力を感じているわけだ）をめぐって圧迫とエロスとの両方が生じるのである。

しかし、高等教育と男らしさの規範の結合が現在では存在しないことは、すでに明らかであるし、また、ここでは触れないが、モッセの言う「カトリック南欧人」に、近代ドイツやイギリスの男らしさがそのまま当てはまったわけではない。男性のホモソーシャルな絆ということ一つを取ってみても、場所と時代の限定を踏まえて考察されねばならないとは、セジウィックも注意を促しているところである。

転落恐怖症

さて、すでに若干先走って言っているように、男らしさと高等教育（のちには、とりわけ旧制高校）との結合は近代日本にも見られ、この点においては、ドイツやイギリスに近い。モッセは、両国の男らしさの理想が驚くほどよく似ている理由を、^{リスベクタビリティ}市民道徳にがんじがらめになったプロテスタント精神のなかに見ているが¹⁴⁾、近代日本の場合は、まずは士族のエートスの影響を挙げることができよう¹⁵⁾。小森陽一は『坊っちゃん』に触れて次のように指摘している。ここには、われわれがいままで見てきた、男同士の絆、高等教育と男らしさ、学校のなかのホモエロティシズムなどなどが、そろって顔を出してくれる。

士族が形成する藩というホモソーシャルな場において、藩校を中心とした教育の場は、士族的「男」らしさを獲得する所であった。坊っちゃんにとっての学校も、そのような場^{トボス}であった。「実業家」、「商売」人にならないために、彼は「物理学校」の書生になったのだし、高等教育機関の序列は、そのまま「男」らしさの階梯として意識されてもいたのである。

赤シャツは気味の悪い様に優しい声を出す男である。丸で男だか女だか分かりやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業

生ぢやないか。物理学校でさへおれ位な声が出るのに、文学士がこれぢや見つともない。

坊つちやんに言わせれば「大学卒業生」で「文学士」であるなら、それは学歴社会のトップなのだから、当然最も「男らしい」存在でなければならなかったのである。『坊つちやん』という小説は、一人の年少者が一人の年長者〔赤シャツ〕にあこがれつつ、彼に裏切られ、ほぼ同年齢の男〔山嵐〕と盟友関係を結ぶ物語である¹⁶⁾。

赤シャツのような高学歴のイヤなやつ、男らしくないやつというのは、現在ではむしろ、高学歴者の通俗的なマイナス・イメージに結びついているだろう。日本は敗戦後のどこかの時点で、高等教育と男らしさの結合を完全に失ったのである。「チューインガム東大生」のポルノ作家と「キイキイ声」のサルトル学者との対立や誤解も、この視点から考察されうるかもしれない。

しかし、日本の特徴を見ていくうえで第一に注目すべきは、次のことであろう。つまり、やはり漱石の小説に典型的にあらわれているのだが、高等教育を受けた男性が自分の男らしさに誇りをもっているのにたいして、それが周りの者たちに正しく理解されない、それにふさわしい尊敬が与えられないというヒガミである。ここに、『行人』の一郎や『道草』の健三や『こころ』のKたちを襲う孤独が生まれ、また他方で、苦沙弥先生や広田先生のグループのような、金権主義や女や家族から超越した（ただし、それに苦しめられてはいる）男性同盟ができあがる。高等教育と結びついた男らしさは、国民的なものというより、高等教育を受けた男性たちのなかだけで特権的に分かちあうべき自己^{アイデンティティ}像であった。

その明治日本の「先生」である近代ドイツやイギリスの場合には事情は異なり、知的中産階級は、自他ともどもに認める国民の代表に位置した¹⁷⁾。そして何より、国家じたいが世界の頂点に立つのである。19世紀後半は大英帝国の全盛期であり、19世紀の終わりには、普仏戦争に勝利した新興ドイツ帝国（とアメリカ合衆国）が工業、科学、軍事の面で大英帝国に迫っていく。

当時の君主の名に因んで、それぞれヴィクトリア時代、ヴィルヘルム時代と呼ばれるころのことである。

だが、最も高い所にいると自覚したとき、ひとはむしろ、転落の恐怖と自己批判の衝動に襲われるのかもしれない。拙論が扱おうとしている、男性・白人・知的中産階級という三位一体は、女性・アラブ／アフリカ／アジア・無学無産という（現在の研究テーマとしては）無敵のサバルタントリオの正反対に位置するが、この恵まれている悪者という損な役回りの意識は、すでに本人じしんがもっていたのだろうか。

いや、実際、頂点は転落のはじまりを意味していた。というのは、頂点に立ったとは、当時の資本主義システムの覇者となったということであるが、しかし、その資本主義のメカニズムは、リベラルな個人の精神力すなわち市民的な男らしさの規範も、ひとりの生身の男としての肉体力も、押しつぶしながら突き進んでいき¹⁸⁾、この世界を動かすために、ひとはもはや「男」である必要はないと思い知らしめるだろう。世紀末に女性解放運動が開始され、「新しい女」が登場するのは偶然ではなかった。

大英帝国とドイツ帝国は、と言うより、その国民的代表たる知的中産階級の男性たちは、まさにトップを切って転落の恐怖を体験する名誉にあずかる。こうして男性・白人・知的中産階級という不戦敗トリオは、使い古された言葉を借りれば、ジェンダー、人種、階級の揺らぎといったものと直面する。例の自己同一性の危機というやつだ。女と植民地人と労働者の上に君臨していながら、それゆえにこそ彼らに下から脅かされていると不安になる……。しかし、こうした状況は、世紀転換期における男性性の^{リファッシュョニング}再成型あるいはドイツ教養市民層の没落として、しばしば取りあげられてきているので、もはやここで触れる必要はあるまい。

この場所で確認しておきたいのは、天下の大英帝国が抱いた被害妄想と没落恐怖を、『ジキル博士とハイド氏』（1886）、『ドラキュラ』（1897）、『闇の奥』（1899）といった、従来、世紀末の通俗的な文学と見なされていた作品のなかに探りだす（ただし、ウッカリすると耐えがたいほど凡庸になってし

もう) 研究動向である¹⁹⁾。日本でも『ドラキュラの世紀末——ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』^{ゼノフォビア}という成果がすでに出ているが、ありがたいことに、この題名だけで、すべてを語ってくれる²⁰⁾。つまり、健全であったはずの、あるいは健全でなければならない男性の共同体が外部から、たとえば東欧出身のドラキュラによって、また内部から、たとえば内なるハイド氏によって脅かされているという恐怖である(そのうえ、それを文化研究^{カルチュラルスタディーズ}するという流行もちゃんとあらわされている)。

そして、これと同じような世紀転換期の男たちの不安と、男性共同体の危機を描いたのが、ドイツの学校物語群ではなかったろうか。これが、公認されている分だけ退屈なホモエロティシズムや教育批判といった昔ながらの視点から学校小説を眺めるのを停止しようとしているわれわれの出発点である。さらに言えば、大英帝国の怪奇小説、ドイツ帝国の学校小説、大日本帝国の知識人小説、つまりたとえば『ドラキュラ』と『車輪の下』と『吾輩は猫である』(1905)とを、あるいは『ジキル博士』と『寄宿生テルレスの惑い』(1906)と『三四郎』(1908)とを、同じ平面に並べてみることもできるのではないかということだ。すくなくとも、登場人物がすべて国民的エリート男性たちであり、彼らが特権的グループを作っている、と同時にすでにそれが脅かされているという共通点は、すぐに目につく(ひとりぼっちのドラキュラだって故郷のルーマニアに帰ればエリートだ)。しかし、いまはそこまで進むのを諦め、ドラキュラやハイド氏や漱石の人気に羨望のまなざしを送りつつ、ひとまずドイツの世紀転換期の学校に話を限定しよう。

いい気な息子たち

というのも、ここで最も重要なのは、そうした同性同質集団が、息子たちあるいは一種の独身者たち(妻帯していても独身者的ではありうる)によって構成されていることであり、当然ながら、それはドイツの学校物語=思春期物語については説明抜きで納得されることだからである。もっとも、ジキル氏や友人たち、広田先生や同志たちが、あるいは同じくヴィクトリア時代

の人物であるシャーロック・ホームズが、それなりの地位をもちながら、いつまでも独身でいるのも、読者にはなんとなく当たり前のことのように思われてしまうのだが²¹⁾。女（と）の関与を排除し、父への成熟を先延ばしにすること。これは漱石の高等遊民たちをめぐって、しばしば指摘されるであろう（ただし漱石じしんは、悲喜劇的に奮闘する家長であった）。

あるいはまた、ドラキュラ退治に乗りだす六人の「連合の力」²²⁾ から、唯一の女性であるミセス・ハーカーは排除されねばならない。「ミセス・ハーカーは、この件からはずれた方がいい。世間のことに通じ、若い頃に幾多の修羅場を経てきた私たちにとっても、事態は十分に苛酷なのです。女性にはまったく相応しくない」²³⁾ とは、夫のジョナサン・ハーカーも含めた五人の勇敢な男性たちが共有する思いやりと優しさである。

こうした時ならぬ息子たちの蔓延は、やはり世紀転換期にフロイトが西洋ブルジョア家庭のために提出したエディプスの物語が、しばしば指摘されるように、息子の視点から語られていることとも対応しているのかもしれない。

しかし、それならば、息子とは何か。ひとが実はいつまでもそこにとどまりたいと秘かに願うような息子とは、いったい何なのか。第一には、次のように言えるだろう。生意気な東大生宇能鴻一郎の例も示しているように、息子と生徒は、つまりより年若い者たちはつねにいい気なものなのである、と。もっとも、これについてはすぐさま、息子（生徒）の受難と父（教師）の無理解こそドイツの学校物語で描かれたものではないか、と反論されるにちがいない。たしかに、そうである。たとえば、学校物語の流行現象に最初に注目したひとりであるローベルト・ミンダーは、次のように言う。

「子供の世紀」〔1900年出版のエレン・ケイの著書の題名〕は、ドイツの小説においては、驚くべきほどの数にのぼる生徒の自殺また自殺で幕をあげる。ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』の神学校生は、トーマス・マンのハノー・ブッデンブロークがチフスへと身を沈めていったように、自ら水のなかに滑り落ちていく。エーミール・シュトラウスの描くカールスルーエ

のギムナジウム生（『死神』）はピストル自殺をし、フリードリヒ・フーフの作品の主人公であるミュンヘンのギムナジウム生（『マオ』）は縊死する。これら印象派の物静かな作品はみな、1901年から1907年のあいだに出版された²⁴⁾。

ここに挙げられているのは、時間の審判に勝利をおさめた作品であり、フーフの小説以外は邦訳でもよく知られているが、言うまでもなく、この時期にはその他にも多くの、上級学校の生徒を主人公とした作品が書かれ、そして現在では忘れられてしまったのである。マンとフーフの作品は、堅実なドイツ市民の家系が、繊細すぎる（ナチス用語で言えば頹廢した²⁵⁾）息子によって滅んでいく運命を描き、ヘッセとシュトラウスの生徒たちは、理解のない教師と父のために破滅する。要するに、息子と生徒は上の世代の犠牲者であった、というように描かれるのである。

ドイツ帝国において時代の危機が、このように世代間の争いや上級学校の少年たちの問題としてとらえられたのは、なぜなのか。生徒や少年が注目を集めたのは、文学の世界に限られた現象ではなかったという。すでに述べたように、近代産業資本主義・帝国主義の発展は、従来の教育、すなわち教養ある市民を育成するための人文主義的教育や古典語教育よりも、実学や英語教育を求め、職業世界の構造もまた、それに合わせて変化を余儀なくされる²⁶⁾。これはたいへん分かりやすい話だ。君臨者たる教養市民層の転落恐怖は、いや、転落そのものは、まずその階層の少年たち、つまりまだその職業に就けていない者たちを直撃したわけで、彼らは、このまま進めば自然に父と同じようになれるという安定と退屈とを失ったのである。どうして、少し遅れて生まれてきた僕たちには、あなたたちに恵まれていたポストがないんだ。こうした世代間の怨念が、ワイマール共和国末期には、失業に最も苦しめられた若い大学卒業者たちのナチス支持へとつながっていく。かつて繁栄を謳歌したものが危機感を抱くとき、それがつねに次世代の崩壊、再生産の不具合として議論されることは、現在の日本の状況が証明しているだろう。

しかしながら、逆に考えれば、父や上級学校もまた、若い世代にたいして権威を失ったのだった。彼らは息子と生徒たちに、もはや何も与えることができない。問題がむしろこちらのほうにあるのは、明らかではないか。いずれにしろ父の失墜なぞ、いまさら言いだすのも恥ずかしいテーマではあるが、ドイツの場合、第一次世界大戦の敗戦が、他の国々に先駆けて、それを明白な事実にしてしまったことは注目しておいてもよい。世代間の争いこそ、ドイツ学校物語の、いやドイツ近代史そのものの核心である。

父の失墜は、学校物語の流行と歩調を合わせるかたちではじまった、やはり教養市民層の若者を中心としたドイツ青年運動のなかでも宣言されていた。青年運動にまつわるホモエロティシズム、正確に言えばナショナリスティックなホモエロティシズムもしくはホモエロティックなナショナリズムはしばしば取りあげられているが、そのさい、青年運動の理論的指導者であったハンス・ブリューアの著作である『エロスの現象としてのドイツ・ワンダーフォーゲル運動』（1914）と『男性社会におけるエロスの役割』（1920）に言及するのが定番となっているようだ。これも題名が多くを語ってくれるからである。女の支配する家庭を離れ、女に捕獲された哀れな男である実父を見捨てて、信頼できる指導者（Führer ワンダーフォーゲルのさい先頭を歩く者）のもとに若い息子たちが集まり男性同盟（Männerbund）を結成する、この男性間のエロスこそ、国家と文化とを形成するのだ、と。家父長制と性分業に基づくブルジョア社会に最初の揺さぶりをかけたのは、「妻」になるのを拒否したフェミニストたちではなく、「妻」を必要としないブルジョア息子たちだった。

ユルゲン・ロイレッケは、世紀末以来のブルジョア家庭の危機、とりわけ教養市民層家庭の不安定さと、家庭の上部に男同士の結託を位置づける男性同盟思想の隆盛との連関に注目する。このことが他の欧米諸国にも見られる現象なのか、それともドイツに特殊なものなのかは、にわかには判断しがたいが、「いずれにしろ、第一次世界大戦の体験とその敗北が国粹主義的民族派的グループのなかでどのように摂取されたかが、〔両大戦間のドイツで〕男

性同盟の思想が広まるうえで中心的な役割を果たした。ナチスの或る教育書は過去を振りかえりって、1933年に次のように言う。戦争は『かけがえのないものなのに、しかし忘れられ衰亡していたあの教育力の再生』へとつながっていった、と。『あの教育力』などと言われたときには、第一に、英雄的な男性同盟が念頭におかれていたのである。ドイツ青年運動は、ヴィルヘルム時代の社会もすでにほとんど見失っていた、男性のこのような『規律形態』再生の先触れであった、と²⁷⁾。

ワイマール共和国の自壊のなかで、若い男たちは、つまり息子あるいは生徒は、ますます未来のための革新のシンボルへと祭りあげられていくのだった。かくして、ナチスは青春と清潔と規律の党として登場し、ヒトラーはFührer（日本語では総統と訳されているが）と呼ばれることになる。

しかし、いまはひとまず（何の話題でも吸いこんでしまうブラックホールのような）ナチスを離れ、ここでもう一度、ローベルト・ミンダーが挙げていた不幸な生徒たちに戻ろう。『マオ』（1907）を除外すれば、滅んでいく少年たちには、カール・ノートヴァンク（『死神』）、ヘルマン・ハイルナー（『車輪の下』）、カイ・メルン（『ブッデنبロック家の人々』）という、ふてぶてしく生きていく学校友達が寄り添っている。彼ら生き残りは、ヴェルターを自殺させたゲーテが自らは救われた者であったと言われるように、作者の一部と見なされ、一般読者には、しばしばこちらの登場人物のほうが魅力的に映ることもすくなくないようだ。とりわけ、かっこいい学校反抗者で詩人のヘルマン・ハイルナーの人気は、日本でも高い。能天気なカイ・メルン伯爵ははじめから学校や教師のことなど屁とも思っていないようだ。トーマス・マン（とナチス）好みの金髪碧眼白晳の美少年であるらしいカイは、しかし、髪はくしゃくしゃで服装にも無頓着であり、授業中は物語創作に熱中している。

世界文学の形姿となったハイルナーとカイとは違って、正々堂々と教師と渡りあい、理路整然と友人の父親を批判するノートヴァンクは、あまりにも勝者であるがゆえに、かえってつまらない形姿になってしまったのかもしれ

ない。森でピストル自殺して自宅に運ばれてきた息子を二階の部屋まで抱えあげることができない父は、階段の踊り場のところで、ノートヴァンクの逞しい腕に息子の死骸を引きわたさざるをえない。父は完敗した。通常の文学史では、第一次大戦前後のドイツ表現主義における「父親殺し」（1920年刊のアーノルト・ブロンネンの戯曲の題名。しかもこの父はすでに篤実な労働者だ）ということが強調されるが、どうやら父は殺される前に、とうに敗北していたらしい。それともこの百年間、父と教師は負けっぱなしなのだろうか。

またまた話がナチスに戻ってしまうが、ヘッセとマンが代表的なナチス批判者になるのにたいし、無敵の息子ノートヴァンクの造形者たるシュトラウスが1930年にナチス黨員になっていることは注目に値するだろう。現在まで生き残った学校物語は、破滅した息子たちの話であると同時に、あるいはそれ以上に、生き残る息子たちの物語であった。ただ、ヘッセとマンは生き残ったあと、いい気な息子の特権をきっぱり捨てたのである。

世紀転換期のドイツ学校小説の作品一覧表が作られるとき、たいてい最後書きこまれるのが、1930年に発表されたフリードリヒ・トーアベルクの『生徒ゲルバー』である。クッパーという名の教授に苦しめられたギムナジウム生ゲルバーが卒業試験の結果発表の直前に、悲観して教室から飛び降りて死んでしまう（死後、合格だったことがわかる）という筋をもつ典型的な生徒自殺小説である。「クッパー神様」と生徒たちに^{あだな}綽名で呼ばれるこの数学教師にとって、教室の少年たちは自らの無限の権力を確認するための道具であった。その様子を「そうしてクッパー先生はこの確認を淫らに抱きしめ、裸で懇願する女を所有したときのように興奮した」²⁸⁾と描写される「クッパー神様」は、ほとんどサディストであり、せいぜいのところ、たんなる大馬鹿者にしか見えない。これだけ横暴な神が描かれているというのに、むしろ教師の薄っぺらさが強調されてしまうのだ。これは生徒の自殺ではなく、『ウンラート教授』同様むしろ教師の自壊を描いた小説なのである。

だから、ミックスが世紀転換期の学校物語についての研究書で最後に挙げ

てみせたのは、『生徒ゲルバー』（実は中心となるのは「クッパー神様」）ではなく、1937年出版のエデン・フォン・ホルヴァートの『神なき若者たち』（*Jugend ohne Gott*）であった²⁹⁾。ギムナジウムを舞台とした推理小説仕立ての作品で、戦後のドイツでは映画化もテレビドラマ化もされているこの人気作の主人公は、歴史と地理の教師である。彼は、担当教科の性格上、ナチスの言説とどうしてもかかわらざるをえない。ナチスの教育をそのまま受け入れていく少年たちに違和感を覚えながらも、生徒の手紙や日記や逢引や買春をのぞき見するだけの曖昧な傍観者にとどまる彼は、結局は現状を黙認してしまう。そして最後に学校を去るのは、しかも敗北した逃亡者のように去らざるをえないのは、もはや生徒ではなく、教師のほうである。『神なき若者たち』を出版して一年後に亡命先のパリで事故死したホルヴァートのための弔辞のなかで、クラウス・マンは次のように言った。

この本の悲劇的な集合的主人公である神なき若者たちは、もはや何の理想も信仰ももたない。物質主義の時代は彼らから信仰を奪い、ファシズムは失われた敬虔さの代わりになるものを何も与えなかった。ファシズムが与えたのは、暴力崇拜と血腥さという原則だけだった。神なき若者たちは悲しげでもあり、邪悪でもある。残酷で、そしてメランコリックだ。ホルヴァートが描いた絶望した危険な若者たち、それは第三帝国の若者たちである³⁰⁾。

ここに、世紀末から続いた学校物語が終焉を迎える。うすうす予想されていたこととはいえ、息子たちのほうが最終的な勝利をおさめたのである。

クラウス・テーヴェライトは、すでに述べたようなドイツ的男性同盟の思想を前面に押しだした義勇軍（Freikorps）の将校たちを描いた研究書『男たちの妄想』のなかで次のように言う。義勇軍とは、ドイツ帝国の消滅・敗北後も戦いつづけ、やがて一部はナチスへとつながっていった兵士たちの集団である。

彼らは惨めにも退位を強いられた父であるヴィルヘルム二世より永く生き延びた息子としてペンを執り、父の誤りを修正したいと心に念じている。父親は機能を停止した。息子たちは父のあとを襲ってドイツという母をめぐる後継者同士の戦いに加わる。ファシズムにおいて家父長制はその支配を長子相続という形で確立する。そこまでを確認しておこう。どこを見回しても息子ばかりだった。ヒトラーもそうである³¹⁾。

言われてみれば、ヒトラーもまた、ベルリンの地下壕で自殺する直前まで、ぐずぐずと結婚を引きのばしていたことは事実である。

自治と反乱

ところで、テーヴェライトが考察する義勇軍の将校たちは、たいてい陸軍幼年（士官）学校（Kadettenanstalt）の出身者であった³²⁾。そして、先ほど引用したローベルト・ミンダーの論文も実は、学校小説の一つのヴァリエーションである幼年学校物語の系譜を追っている。幼年学校の世界、これこそナチズム支配の先取りではなかったか、というのがテーヴェライトとミンダーの認識である。しかし、この見解じたいは、ほうほうでよく耳にするものかもしれない。たとえば、ファシズム世界の暗喩と見なされている『蠅の王』（1954）が1990年にアメリカで映画化されたときにも、無人島に漂着する少年たちを陸軍幼年学校の生徒たちにするという効果的な設定変えがされている。だが、このことについては、あとで触れよう。

マンとヘッセはドイツ帝国の上級学校制度の落伍者であり、そのことが彼らの学校描写に影響を与えたのだが、同じころオーストリア・ハンガリー二重帝国が送りだしたリルケとムージルは幼年学校の、しかも同じ幼年学校の出身者であった。ふたりとも、そのときの体験をもとにして幼年学校物語を書いている。広大で空虚なハプスブルク領の東に位置するメーリッシュ・ヴァイスキルヒェン（現在はチェコのフラニーチェ）の陸軍実科高等学校を、リルケは逃げ出すように中退し、ムージルは優秀な成績で卒業した。もっとも、

ムージルの伝記では決まって嬉しそうに引用されるのだが、立派に卒業したムージルもこの学校を「悪魔のケツの穴」と呼んでいるという。

そのムージルの幼年学校小説『寄宿生テルレスの惑い』は、前に触れておいたように『車輪の下』（と『坊つちやん』）と同年の1906年に発表された。さらに両作品が、これも学校小説の一つの形式である寄宿舎小説であることを、共通点として挙げておきたい。すでに題名が挙がっている『春のめざめ』『マオ』『死神』『ブッデンブローク家の人々』『生徒ゲルバー』『神なき若者たち』に登場する生徒たちは自宅からギムナジウムに通っているが、ムージルとヘッセの小説では、それぞれ幼年学校と神学校が舞台となっており、主人公は寄宿生である。『テルレス』と『車輪の下』は、内外に知られた、まさにドイツ学校小説の代表選手であるが、設定じたいはそれほど代表的というわけではないのだ。ギムナジウムの少年たちが、産業資本主義の発展と大衆化時代の到来のなかで、確定的な将来の図を見失っているのにたいし、幼年学校と神学校は将来の職業（まさに男の職業）と結びついているために、一種の安定と、それ以上の息苦しさを生徒たちに与えていた。その状況は『車輪の下』と『テルレス』によくあらわされている。

我が国では寄宿舎小説としての『車輪の下』が知られており、また少女漫画の影響もあって、ドイツの学校と言えば寄宿舎だというイメージが強いが、ギムナジウムは自宅通学が基本であり³³⁾、むしろその点が、パブリックスクールや旧制高校（とりわけ全寮制であった第一高等学校）との最も大きな違いとなっていると言える。つまり、生徒による寄宿寮自治体制が日英の上級学校の誇るべき特徴となっていたが³⁴⁾、ギムナジウムには生徒自治の可能性がなかったのである。この「欠点」の克服はドイツの学校改革の目玉となった。たとえば、青年運動とともに学校批判の急先鋒となった改革教育運動の教育家たちは、「田園教育舎」(Landerziehungsheim) と呼ばれた私立寄宿学校をつくり、自然に恵まれた田舎の寄宿舎のなかで生徒の自主自立行動を育むという方針を掲げるのである。授業料がひじょうに高かったこの学校は、都会の上層階級の、理解ある父たちに支持された。

そして、ジョージ・モッセに拠れば、ナチス幹部もまた、ギムナジウムの状況にたいして批判的であり、国家の指導者を養成するために、パブリックスクールの自治寮と監督生制度を真似た「純粹に男性的な」寄宿舎を構想したのだという³⁵⁾。この場合の「男性的」システムとは、教師の介入を排除して上級生が下級生を指導し、下級生は上級生に（小間使いか妻のように）仕える、というものである。こうして最初は、上の男に従い仕えることを学び、そののちに、今度は下の男に正しく命令し自分に仕えさせる態度を身に付ける。もちろん、未来の国民的指導者にとって重要なのは後半のほうにちがいない。

ところが、ドイツの学校の場合は、教師の権力が強すぎるために、あるいは知育偏重の無意味な詰めこみ勉強を強要されるために³⁶⁾、男たちの真の共同体が成立せず、男らしさを獲得する機会が、将来の国民的指導者たる少年たちから奪われてしまっている、この状況を、イギリスのエリート教育を見習って改善すべきだ、というわけなのである。ついでに言っておけば、日本の旧制高校寄宿寮の雰囲気は、生徒間の上下関係の無意味な厳しさを含まず、いやそれどころか教室における生徒と教師のあいだにも一種の平等な仲間意識があったと伝えられている。つまり、試験によって選ばれた者だけがユートピア的平等世界を享受できるわけだが（小学校は残酷な差別世界だったにちがいない）、それは特権的な高等教育の場ではじめて、皇国史観ではない日本史が教えられ「天皇制初等教育の体臭が洗い落」³⁷⁾ されることと対応しているだろう。日本ではエリート内部の世界は、なぜかほとんど平等なのだ。こうした日独英の相違は、高等教育を受けた男性たちがどのようにノブリス・オブリージュをとらえたか、エリート（自分）と大衆との関係をどのように考えたか、という相違につながり、さらには知識人社会の在り様の相違となるのだが、ここではひとまず問題を指摘しておくだけにとどめたい。

さて、本筋に戻ろう。この種のパブリックスクール讃歌に対抗したのが、1969年にカンヌ映画祭グランプリを獲得するイギリス映画『i f もしも…』（1968）であった。この映画は、伝統あるパブリックスクールの寄宿寮を舞

教室と寝室

台に、アウトサイダーの生徒の反逆を描いている。学生運動の季節につくられた映画であり、またアンダーソン監督に拠ればジャン・ヴィコの名高い生徒反乱映画『操行ゼロ』(1933)を範と仰ぐものでもあるが、しかし、ここでパブリックスクール生たちを支配・抑圧し、また反逆生徒を鞭で罰する(鞭打ちは、それが儀式であるぶんだけサディスティックである)のは教師ではなく、寄宿寮の監督生たちだ。つまり、称賛されてやまない例の自治制度が一種のファシズム社会のシステムとして描かれるのである。ナチスの下したパブリックスクール評価はやはり正しく鋭かった。

『i f もしも…』の教師たちは、まさに知的中産階級の代表としてリベラルであり教養を備え、生徒にも十分な理解と寛容を示すが、しかし生徒間の残酷な権力関係にはまったく気づかぬか、見て見ぬふりをしている。あるいは、ごく単純に生徒の自治を信頼し誇りに思っている。もちろん教室は教師が公正に統率する場所であり、そこでは監督生たちも一生徒(時にはあまり賢くない生徒)にすぎないが、寄宿寮という、プライベートな生活がしかし集団的に営まれる空間においては、彼らは不公正な支配者となる。そして、彼らの権力が示される象徴的な場所が共同寝室なのである。自らは個室の寝室をあてがわれている監督生たちは、他の寄宿生の共同寝室を徹底的に管理しようとするのだ。そこは、宇能鴻一郎を性的羞恥にまみれさせる、同性集団を規律のもとに、しかもこちらのほうを強調しなくてはならないのだが、恣意的な規律のもとに行動させようとする場所である。

共同寝室は、先に挙げた『操行ゼロ』と、それと並ぶ寄宿舎映画の古典である『制服の処女』(1931)のなかでも重要な役割を担う。考えてみれば共同寝室こそ寄宿舎学校のシンボルであり、学校の規律と監視が集中する場所、自制心ある男らしさが鍛えられる場所である(というのは、『キタ・セクスアリス』の表現をそのまま借りれば「西洋の寄宿舎には、青年の生徒にこれをさせない用心に、両手を着ぶとんの上に出して寝ろという規則があって、舎監が夜見回るとき、その手に気をつけることになっている」からだ)。生徒たちが共同寝室のなかで反乱を起こし大騒ぎする、『操行ゼロ』のなかの

あまりにも有名なシーンは、いまでは懐かしくも恥ずかしい言葉になったとはいえ、やはり「祝祭的」と言いあらわすしかあるまい。普段なら生徒たちがベッドの上にズラリと並ばされ点検をうける所であった共同寝室で、教師や舎監の権力が無化され、道化の王（生徒）を先頭に生徒たちが練り歩く。枕の中身は飛びだし、ひるがえった寝巻きの裾からは小さな性器さえ見える（どうしても山口昌男の言説の繰りかえしになってしまうがご容赦願う）。

『制服の処女』でも、共同寝室は女生徒たちの秘かな反乱の場所として提示されるが、しかし、その（隠された）首謀者となるのは、ひとりの美しい、現在では同性愛者と見なされている女教師である。生徒たちの憧れのまとうであり、したがって女校長とは対立している女教師が、共同寝室のベッド上の少女たち一人ひとりにおやすみのキスをしてまわるとき、そこには、教師を中心として皆の心が一つになる、女だけのユートピアが出現するだろう。共同寝室は、厳しい良妻賢母教育を受けるプロイセン将校の娘たちにとって、一瞬だけ解放がもたらされる「昨日と今日のあいだ」（『制服の処女』の原題）の時空であった。原作は主人公の生徒の自殺で終わるが、映画では、一致団結して学校に反旗を翻した女教師と生徒たちとによって、最後に校長のほうに敗北する。

だが、もちろん、こうした生徒反乱を称賛することが、というより、いやというほど繰りかえされてきた称賛をなぞることが目的ではない。1930年代初頭のファシズム前夜に作られた生徒反乱映画のなかに、体制にたいする秘かな反抗を読みとることはそう難しい作業ではあるまい。現に『操行ゼロ』はたちまち上映禁止になった。『制服の処女』がナチス・ドイツで発禁にならなかったのは、性欲がない女に同性愛はありえないとするナチスの見解のお蔭であり、我が国をはじめとして世界各地でヒットしたが、皮肉なことにアメリカでは反軍国主義、反ナチスの映画として歓迎されたという。

こうした称賛や評価を心にとめつつ、しかし、むしろここでは『i f もしも…』を、生徒反乱映画の系譜につながる作品と見なすわけにはいかないということを強調したいのである。『i f もしも…』が描くのは、権威と公平

教室と寝室

をあらわす教師が存在せず、その不在ゆえに、生徒間に、名目上は自主自治である支配と被支配の関係が生まれてきてしまうメカニズムである。そこには、『操行ゼロ』と『制服の処女』がユートピア的に描いたような生徒同士の（お馬鹿な教師と戦うための）連帯と友愛が生まれえない。そしてその点で『i f もしも…』は、『車輪の下』や『寄宿生テルレスの惑い』を筆頭とする種類のドイツ寄宿舎小説の末裔となるだろう。連帯と友愛の欠如は、現在では、ナチスに支配された世界の予言であったと称賛され、ナチス時代には、ユダヤ的な頹廃した世界の特徴と非難されたのであった。

隙間活用法

『操行ゼロ』や『制服の処女』が上演されたころ、『飛ぶ教室』（1933）と『チップス先生さようなら』（1934）が刊行されたが、それぞれギムナジウムとパブリックスクールを舞台とするこの二つの学校小説は、現在でも根強い人気を保っているようだ。我が国でも結構読まれている。イギリスの作品では「チップス先生」という題名によってすでに明らかなのだが、エーリヒ・ケストナーの描くギムナジウムでも、中心となるのは、実は生徒たちではなく、「公正先生」（Justus というラテン語）と綽名される寄宿舎の舎監（教師）である。「公正先生」は厳格だけれども公平で、生徒の悲しみも喜びも長所も短所も知りつくしており、だから生徒の全員が「公正先生」を尊敬し慕っている。独身で同性との結びつきを大事にする点でも³⁸⁾、「公正先生」は『制服の処女』の女教師と似ているところがあると言えるだろう。ただ、女教師のほうは校長に支配されており、結局は生徒と同じくらい自由を奪われているのにたいし、寄宿舎の搭のてっぺんに住む「公正先生」はほとんど神に等しい力をもっている。『飛ぶ教室』は、ナチスの政権獲得直後に出版されたのだが、「公正先生」のようなギムナジウム教師の「権力」こそ、ナチスの憎んだ（あるいは求めた）ものだったのだろうか。

『飛ぶ教室』と『チップス先生』の共通点は、先生の清く正しい支配が、学校のすみずみまで行き渡っていることだ。いざとなれば、教室も先生も世

界のすみずみにまで飛んでいこう。そしてここから、もう一つの共通点が浮かびあがってくる。つまり、この立派な先生のせいで（連帯と友愛だけには満ちあふれていても）、学校に隠蔽されつつ生息する二つのもの、つまり性と不条理のための隙間^{すきま}がなくなってしまうのである。もちろん『飛ぶ教室』は子供向きの本であるが、むしろだからこそこで、どのようにしたら性と不条理を描かずにすまされるかが、よく見てとれる³⁹⁾。

共同寝室は、すでに述べたように規律と監視に縛られているゆえに、かえって多くの隙間を抱えることになる。だから映像作品において、学校の共同寝室は繰り返され描かれてきたのではないのか。しかし、これはたんなるホモエロティシズムでもなければ、思春期の性の問題というやつでもない。そうではなくて、ここに凝縮されて見てとれるのは、他者との（しばしばサドマゾヒスティックな）緊張関係である。

とにかく、現実には不潔のかたまりのようにしか見えない旧制高校の共同寝室さえも、堀辰雄の手にかかれば、不思議なエロスと緊張の空間へと変わってしまうことは誰でも認めるにちがいない。蠟燭の明かりが大きな鳥のような影を壁に揺らしている、あるいは美しい同級生の長い睫と白い頬をそっと照らしている、あの共同寝室の場面は『燃ゆる頬』のハイライトである。それは、喉を痛めて皆より早めに、ガランとした共同寝室に入った主人公を魅了する隙間の出来事であった。反対に『ライ麦畑でつかまえて』（1951）の寄宿寮の寝室がエロスをもたないのは、ハズレ者の主人公が金持ち男子校の生徒のつまらなさや俗物性を、ガールフレンドや妹に愚痴るからではなく、彼らの寝室が、夫婦の寝室と同じように、はじめから何の隙間も生じようのないほど弛緩した二人部屋だからではないのか。

『車輪の下』と『寄宿生テルレスの惑い』は最も効果的に共同寝室を描いた。それは、両作品が思春期の奇妙な残酷さを隠蔽していないこととつながっている。『車輪の下』の薄暗い共同寝室におけるキス（実は強引な「暴力」的キスと言ったほうがよい）はすでに引用しておいたが、『テルレス』では状況はもう一歩進む。短い休暇に幼年学校に残ったテルレスは、寂しい共同

寝室のなかで、すでに同性間の行為の「女」となっている美しい同級生バジーニを、自分もまた「さながら獲物を襲うように襲ってみたいという残酷な欲望」⁴⁰⁾に駆られるのである。そこは、あとになって、裸のバジーニがテルレスのベッドにもぐりこんできたときには、主人公が必死の抵抗のすえについて「誘惑」に負けてしまう場所にもなる。

ああ、なんと教師の目の節穴であることか！

われわれが現実の体験からも知っているように、「チップス先生」や「公正先生」のような特異な例を除けば、教師の目はつねに節穴であり、間抜けであり、行き届かない。これは、描き方によっては悲劇にも喜劇にもなる事実であり、学校物語において批判され揶揄されてきた状況である。『操行ゼロ』の校長を演ずる俳優はリリパットであるし、ドイツ学校物語の嚆矢となったヴェーデキントの『春のめざめ』(1891)では、教師たちの名前(綽名ではない)は、「日射病校長」(Sonnenstich)「骨折り教授」(Knochenbruch)というようにはじめからふざけたものだ。

それにたいして、『車輪の下』や『テルレス』、そして『i f もしも…』では、教師たちは案外マトモであり、「日射病校長」ほど非現実的ではなく、「公正先生」ほど非人間的でもなく、人間的な、つまり適度に行き届かない目をもっている。従来の学校教育批判という視点から離れてみると、『車輪の下』と『テルレス』が描いているものが、こうして学校のなかに生じざるをえない隙間であるように思われてくるのだ。

というのは、とりわけ寄宿舎物語においては、学校の建物そのものが、欠かすことのできない構成要素となるからである。そして、この建物じたいが実にさまざまなところに隙間を抱えているわけで、これにはどんな教師も太刀打ちできない。ひょっとすると、学校物語とは、文字通り学校という建物が主人公の話なのだろうか。このことは、映像作品である『制服の処女』、『i f もしも…』、『若いテルレス』(シュレーンドルフ監督1966年邦題『テルレスの青春』)を観たことのある者なら、すぐに納得できるはずだ。ここでは、階段、廊下、前庭、回廊、体育館そして共同寝室などの建物中心のショッ

トが印象的に使われているのである。これらの学校は、生徒たちの社会的出自にふさわしく、歴史ある壮大な建物からできている。『車輪の下』のマウルブロン神学校は、しばしばヘッセの伝記的事実とともに言及されるように、中世以来の伝統をもつロマネスク風の修道院を校舎としており、ファウスト博士がこもって錬金術を研究していたと伝えられる塔や、壮麗な回廊や中庭を備えていたという。この古い建物と広大な庭園という背景なしには、『車輪の下』において隙間で起きる事件たち（学校批判の対象にされうる教室のなかの出来事ではない）は成立しえない。

しかし、何と言っても、学校の建物そのものが主役となるのは、『寄宿生テルレスの惑い』においてである。拙論ではひとまず、最も重要とされる16歳の主人公の「惑い」、そのムージルの「生体解剖」については一切触れない。ムージルじしんは、あまり重要ではないと述べている（あるいは弁解している）、しかし刊行当時は相当なセンセーションを引き起こした「素材」だけを説明しておこう⁴¹⁾。

帝国の上流階級の息子たちを集めた幼年学校のなかで、少女のように美しいが、何もかもに劣っている生徒バジーニは、飲食のために浪費した小遣いを補うために同級生のお金を盗んでしまう。それに気づいたバイネベルク、ライティング、そして主人公のテルレスは、教師に告げずに自分たちだけで、幼年学校的男らしさにまったく欠けたこの少年を罰することにする。裸にされたバジーニがバイネベルクとライティングに鞭打たれるとき、傍観者のテルレスはその光景に性的興奮を覚えてしまった自分自身に戸惑うだけだった（テルレスは小説の最後までバジーニに同情を寄せたりしない）。やがてバジーニの支配者たちは、三人三様の欲望と思惑が交錯する葛藤のなかで、次々とバジーニと性的な関係をもつようになる。最後にコトは発覚するが、もちろん教師の目は節穴であり（生徒間の性関係には気づかず）、バイネベルクとライティングは巧みな話術ですべての罪をバジーニに押しつけ、盗みを働いたバジーニだけが放校となり、テルレスは自らの意志で学校を去っていく。

ヴァルター・イエンスが彼の『テルレス』論に「屋根裏のサディスティッ

クプレイ」という題名を与えたように⁴²⁾、バジーニにたいする陵辱と搾取は、学校の屋根裏で行なわれるのである。テルレスたちは、学校の建物の複雑に入りくんだ屋根裏に、赤い部屋と名づけた秘密の一角をもっていた。前世紀に建てられたという壮大な屋敷は「古い建物がよくそうであるように非論理的で、無用な隅っこや、どうしてここにあるのか理由が定かでないような階段が多く」⁴³⁾、彼らが見つけた、屋根裏の小部屋も「もしかしたら、この陰鬱な隅を眺めていて、ふとそこを囲いこんで隠れ部屋でも作ってみたらどうだろうかという中世風な思いつきにとらわれた建築家のたんなる気まぐれの産物」⁴⁴⁾ だったのかもしれない。学校の建物はこのように広大で寂しく、しかも錯綜して多くの隙間を抱えこんでいる。のしかかってくるバジーニの身体を必死で遠ざけようとする、ベッドのなかのテルレスの声なき叫びも膨れあがる欲望も、冷たく空虚な建物に呑みこまれていくかのようだ。

それからテルレスは我にかえって自分自身に叫ぼうとした。バジーニはおまえを騙している、おまえがあいつをもう軽蔑できないように、自分と同じところにまで引き下げようとしている。しかし、叫び声は押し殺された。この広い広い屋敷には生きた人間の声はなかった。長い廊下という廊下には沈黙の暗い潮がじっと動かずに眠っているように思えた⁴⁵⁾。

テルレスの庇護者でありクラスの悪リーダーでもあるバイネベルク（テルレスは最後になって、擬似父たるバイネベルクと決別する）は教師よりも学校の建物を、いや、学校の建物の隙間を知りつくしている。テルレスもまたバジーニとこっそり「関係」⁴⁶⁾ をもつためには、「バイネベルクに教えてもらったあらゆる隠れ場所」⁴⁷⁾ を利用するしかない。

テルレスは、バイネベルクが学校じゅうの地下室や屋根裏部屋の合鍵をもっていることを知っていた。また、この男がしばしば何時間も教室から消えて、どこか、はるか上方の屋根組みの垂木のところか、あるいは地下に木

の枝のように広がった崩れそうな穴ぐらの一つにすわりこみ、いつももち歩いているカンテラの明かりで冒険小説を読むか、超自然的な事柄について思いをめぐらしているのも、知っていた⁴⁸⁾。

教師の特権物である、部屋部屋の鍵と、共同寝室の生徒を見回るためのカンテラを所有しているバイネベルクは、先生たちの支配する清く明るい教室を軽蔑し、先生の目の節穴ぶりを手玉に取り、暗い隙間を支配している。

ナチスのためにスイスへの亡命を余儀なくされ著書も発禁にされたムージルが、のちになって、このようなバイネベルクと、そしてやはりクラスの扇動的リーダーであるライティングのなかに、第三帝国の独裁者たちの萌芽を見いだしたことは、これもまた必ず嬉しそうに紹介されてきた。「こういう学校では、どのクラスもそれぞれ一つの小さな国家である」⁴⁹⁾ とは、すでに小説のなかに登場する言葉である。そして教師はこの「国家」をただ表面上支配しているにすぎないというわけだ。シュレーンドルフによる映画化『若いテルレス』でも、バジーニは象徴的なユダヤ人、傍観者テルレスは当時のドイツ人に重ねあわせられていると見なされた。『若いテルレス』は1966年にカンヌ映画祭批評家連盟賞を受賞し、いわゆるニュージャーマンシネマの口火を切った作品であるが、「ナチズムとのつながりを描いた」というかたちの評価がついてまわらざるをえないことは、戦後ドイツ文化の不幸の一つかもしれない。

幼年学校小説の世界とナチズムとのつながりは、よく指摘されることであり、われわれもその見解を分けもってはいるのだが、ムージルの発言があまりにも出来すぎているために、いまではそうそうナイーヴには引き合いにだせなくなってしまったようだ。しかしここでは最後にわれわれのキーワードである隙間という視点から、隙間を制したバイネベルクのなかに独裁者の種子を見いだしてよいのではないかと思う。隙間からワイマール共和国を掘り崩していった反逆する息子たるナチスが、政権獲得後に最も恐れたのはやはり隙間であった、と。だから、彼らの言説は、すみずみまで行き渡った連帯

と友愛とを謳うのである。

そう言えば、日独のファシズムとも、総動員とか総力戦とか「総」(total)という言葉をやに好んでいたではないか。

註

- 1) 宇能鴻一郎「年譜」『芥川賞全集第六巻』(文藝春秋, 1982年) 511頁。
- 2) 同書, 509頁。
- 3) 宇能鴻一郎「幻滅と悲哀のキャンパス それが学問への失望にならぬよう」(東京大学新聞1962年3月21日号)
- 4) 平井啓之「チューインガム奇談」『ある戦後 わだつみ大学教師の四十年』(筑摩書房, 1983年) 161頁。
- 5) 同書, 159頁。
- 6) 『車輪の下』の単行本は1905年10月に初版が出たのだが, そのさい, 奥付を1906年としたため, 文学史的には1906年発表となっている。Vgl. Matthias Luserke: *Schule erzählt. Literarische Spiegelbilder im 19. und 20. Jahrhundert. Göttingen* (Vandenhoecke & Ruprecht) 1999, S. 68.

ローベルト・ミンダーは, 学校物語の流行やドイツ青年運動にあらわれた生徒たちの反抗運動は1906年に一つのピークを迎えたと見ている。この年, 思春期の性の問題をセンセーショナルに扱ったということで長いあいだドイツ帝国内では上演禁止であったヴェーデキント作の『春のめざめ』(1891)が解禁となり, またハインリヒ・マンの『ウンラート教授』(1905年刊日本では『嘆きの天使』として知られている)が展開する, 教師や親にたいする激しい批判が世間を騒がした。そして, やはりこの1906年に, 改革教育運動の代表的存在であり, 青年運動の理論的指導者であった(のちに青年運動とは決別する)グスタフ・ヴューネケンがヴィッカーズドルフに自由学校共同体を創設し, まったく新しい学校の形態を提示するのである。Robert Minder: *Kadettenhaus, Gruppendynamik und Stilwandel von Wildenbruch bis Rilke und Musil. In: Kultur und Literatur in Deutschland und Frankreich*. Frankfurt a. M. (Insel) 1962, S. 77.

『車輪の下』と並ぶドイツ学校小説の代表作であるローベルト・ムージルの処女作『寄宿生テルレスの惑い』も1906年に発表された。我が国に目を移せば『坊っちゃん』のほかに、『破戒』が出版された年でもある。同年に発表されたこれら日独四つの重要な作品は, 学校を舞台としているとともに(『破戒』の瀬川丑松が小学

校の教師をしていることだけでなく、丑松がどうしても師範学校に進みたかった理由も注目に値する)、父もしくは擬似父との別れを(隠された)テーマとしている点で共通項をもつ。最後に主人公たちは、ドイツの場合は失格生徒として、日本では失格教師として学校を去っていくのである。もちろん、こうした類似を並べたてるだけではあまり意味もないのだが、ここでは、学校が社会の縮図と見なされるといふ共通性を確認しておきたい。

- 7) 世紀転換期の学校物語の主人公たちは、たいてい教養市民層や有産階級に属している(ただし『車輪の下』は例外であり、このことは『車輪の下』を分析するうえで重要なポイントとなるが、ここではひとまず触れない)。しかしながら現実世界では、この世紀転換期ごろから、ギムナジウム生の出身階層として教養市民層の比重が低下し、中間層(中級官吏・中小商人・小学校教員など)出身者が増えてくるという。また1901年には、実科ギムナジウム(Realgymnasium)と高等実科学校(Oberrealschule)の卒業生にも大学入学権が認められるようになり、ギムナジウム独占体制がついに崩壊する。望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史——ギムナジウムとアビトゥーアの世界』(ミネルヴァ書房、1998年)65～87頁参照。こうした教育の大衆化は教養市民層にとって一つの脅威であり、学校物語がその意味での危機感の表明でもあったとしたら、主人公が教養市民層出身に設定されるのは当然であろう。ただ、次のことも頭に入れておかねばならない。出身階層の問題を抜きにしても、当時ギムナジウム卒業者は、同年齢男子の2パーセントに満たないエリートであり、したがって、大多数の人間にとっては、流行の学校物語に描かれた世界は、それがどんなに悲惨なものであろうと、雲の上の話であったわけである。ドイツで学校小説が流行していたころ、我が国では一高生藤村操の華嚴の滝自殺(1903年)が社会に大きな衝撃を与えたが、上流外交官の息子でエリート高校生の「煩悶」も、雲の上の話であり、また同時に、それゆえにこそ、物語として流通できたのである。

ところで、世紀転換期には、下層の少年の不良化も社会問題として(文学テーマとしてではない)大きく取りあげられていたという。これについては、川手圭一「世紀転換期におけるドイツ下層青少年——『ハルプシュタルケ(非行青少年)』の発見」『東京学芸大学紀要 3部門』47号(1996年)を参照されたい。

- 8) Hermann Hess : *Unterm Rad*. Frankfurt a. M. (suhrkamp taschenbuch 52) 1972, S. 72.
- 9) Eve Kosofsky Sedgwick : *Between Men. English Literature and Male Homosocial Desire*. New York (Columbia University Press) 1985, p.177. 邦訳(上原早苗他訳)

『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（名古屋大学出版会、2001年）第九章参照。

10) Ibid., p.207. 邦訳317頁参照。

11) 近代的家父長制と近代主婦の誕生については、瀬地山角『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』（勁草書房、1996年）を参照されたい。

12) ジョージ・モッセ（佐藤卓己他訳）『ナショナリズムとセクシュアリティ 市民道徳とナチズム』（柏書房、1996年）112頁参照。

13) George Mosse: *Das Bild des Mannes. Zur Konstruktion der modernen Männlichkeit*. Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1996, S. 15.

14) モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』32～34頁参照。

15) ヨーロッパのブルジョア階級の男性性は、貴族への対抗意識のなかから形成されていくが、しかし他方で、貴族的男性性が誇りとした「戦士のエートス」(warrior ethos)を受けついでいたという。それは、労働者階級の男性たちとの差異化にとって最も重要なものであったし、またのちの世紀末においては、ブルジョア出身の芸術家たち（たとえば、オスカー・ワイルド）によって、この戦士の男らしさ以外の価値が主張されていく。Cf. Gerald N. Izenberg: *Modernism and Masculinity. Mann, Wedekind, Kandinsky through World War I*. Chicago and London (The University of Chicago Press) 2000, pp.6-13. 日本の場合、士族のエートスは、書生や学生へと引きつがれるとともに、もちろん、日露戦争以後（つまり、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』が書かれるころ）に支配的になる軍人的男らしさの理想のなかにも生きつづけるわけだが、にもかかわらず、高等教育と軍隊とが、男の在り方という点で真っ向から対立してしまうことは、欧米には見られない近代日本の特徴である。この点については、拙著『文学部をめぐる病い 教養主義・ナチス・旧制高校』（松籟社、2001年）所収の「学校小説としての『ビルマの竖琴』」を参照されたい。

16) 小森陽一「男になれない男たち」『漱石研究第3号 特集漱石とセクシュアリティ』（翰林書房、1994年）73頁。

ところで佐伯順子は、漱石の小説をこのような西洋由来のジェンダーの視点から読んだり、セジウィックの理論に当てはめたりする（流行の）作業の限界を指摘する。「というのも、漱石作品が継承している近世の男色の心性は、これらの近代的概念の枠組みにあてはまらないからであり、ここには「ホモ・フォビアを前提とするホモ・ソーシャル、ホモ・セクシャルの区分は成立」しないからである。「聖母を囲む男性同盟 『坊っちゃん』における男色的要素」『漱石研究第12号 特集『坊っちゃん』』（翰林書房、1999年）163頁。

- 17) さらにイギリスとドイツを比較すると、ドイツの教養市民層のほうが、社会における威信・尊敬度が高かったという。ユルゲン・コッカ編著（望田幸男監訳）『国際比較・近代ドイツの市民——心性・文化・政治』（ミネルヴァ書房，2000年）の27～37頁（「ヨーロッパ的比較におけるドイツの市民性の特質」）を参照。

余談ではあるが、我が国が戦後、かつてのヨーロッパのように Japan as No. 1 などと思いこんだとき、それを支える国民的代表と見なされたのは高学歴層・知的中産階級ではなく、確実な技術をもつ実直な労働者（のイメージ）であった。このことは、むしろ日本の没落が語られる現在の言説において、明らかになってきているだろう。

- 18) Vgl. Bernd Widdig: *Männerbünde und Massen. Zur Krise männlicher Identität in der Literatur der Moderne*. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1992, S. 17. このように自らが押しすすめた近代化・工業化・帝国主義化によって他ならぬ自分自身を追いつめていったブルジョア層が、失われた前近代的楽園に逃げこもうとする傾向をあらわしていたのが、1900年前後にはじまる生活改善運動 (Lebensreformbewegung), 自然療法ブーム, エコロジー, オカルト信仰などであった。こうした、何か人生に意味を与えてくれそうなものは現代まで生き残っているわけだが、ナチスはこれらすべての要素をすこしずつ備えもっていた。これについては、次の文献を参照されたい。Jonas Frecot: Die Lebensreformbewegung. In: *Das wilhelminische Bildungsbürgertum. Zur Sozialgeschichte seiner Ideen*, hrsg. von K. Vondung. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1976.

- 19) たとえば、次の研究書を参照されたい。Michael Kane: *Modern Men. Mapping Masculinity in English and German Literature, 1880-1930*. London and New York (Cassell) 1999, p.120. エレン・ショーウォールター（富山太佳夫他訳）『性のアナーキー 世紀末のジェンダーと文化』（みすず書房，2000年）

- 20) 丹治愛著，東京大学出版会，1997年。因みに，大英帝国を脅かす「外国」の一つはドイツ帝国であったという。世紀末にドイツ帝国の鋼生産量が英帝国を抜いて世界一位となる。同書，64頁参照。

- 21) 江藤淳は『それから』の代助の，書生と婆やにかしずかれた高等遊民ぶりと「英国の独身生活者の生活様式」との類似を指摘している。『『それから』と『心』』『講座夏目漱石第三巻』（有斐閣，1981年）55～61頁（「バチュラー代助」）参照。

- 22) 丹治，前掲書，80頁。『ドラキュラ』が書かれたころ，大英帝国は「栄光ある孤立」と呼ばれた外交政策をもはや維持できず，「連合」できる国を探していたのだという。

- 23) ブラム・ストーカー（新妻昭彦・丹治愛訳）『ドラキュラ 完訳詳註版』（水声社、2000年）、274頁。
- 24) Robert Minder, a. a. O., S. 76. 『ブッデنبロック家の人々』は、もちろん学校小説とは言えないが、トーマス・マンに拠れば、この長編小説は、第11部のハノー・ブッデنبロックの章を「少年短編」（Knabennovelle）として描くという構想が予想以上に膨らんで出来上がったものなのだという。Vgl. York-Gothart Mix : *Die Schulen der Nation. Bildungskritik in der Literatur der frühen Moderne*. Stuttgart (J. B. Metzler) 1995, S. 36.
- 25) 世紀転換期の学校小説を、健全なドイツ男児の退化の表現と最初にとらえたのは、ナチス時代の文学批評であった。『ドラキュラの世紀末』のなかに「反ユダヤ主義の世紀末 ユダヤ人恐怖と外国人法の成立 混血恐怖とホロコースト」という一章があるが、ナチスの言説もドイツ人の頹廢の原因をユダヤ人の陰謀と見ている。そして、その頹廢を克服したのがナチスである、と。たとえば、1943年に発表された論文を見てみよう。「ドイツ青年運動の最も優れた永久不滅の代表者たちは、まさにこのことだけを望んでいたのだった。ヴァルター・フレックスのことを考えてみよう。フレックスの『二つの世界のあいだのワンダーフォーゲル者』〔1916〕は、われわれが今日若い兵士たちの最も純粋なタイプに見るような、騎士道精神が求めるゲルマンの若人の理想像である。ところが、その一方で、あの傾向も伸してくる。つまり、成長に伴う苦しみと闘っているとはいえ、その苦悩を克服し、そのなかで、あるいはそこから抜け出て自らを精練しようとする健康な若者たちを、文学の世界の描写に値しないと見なす傾向である。そして、フランク・ティースやヘルマン・ヘッセやトーマス・マンやアーノルト・ツヴァイクやら（ほんのすこし名前を挙げているだけなのだが！）の描くあの病的な、あるいはすくなくとも頹廢的な世界があらわれる。デカダンスと、そしてユダヤ民族によって仕組まれ支援された、魂の腐敗がますますはびこる。われわれドイツ民族においては克服されたとはいえ、いまだに潜在的な、それゆえに必ず知っておくべき危険と今日でも見なさなければならぬ過渡の時代がはじまるのである。」Ruth Westermann : *Jugend und Reife in Darstellung unserer Zeit*. In : *Bücherkunde. Monatshefte für das deutsche Schrifttum* 10, 7 (1943). S. 244. ただし、引用は、York-Gothart Mix : a. a. O., S. 3. に拠った。
- 26) Vgl. Ulfried Geuter : *Zeit der Kriesen—Die Jugend in der deutschen Literatur um 1900*. In : *Die Geschichtlichkeit des Seelischen*, hrsg. von G. Jüttermann. Weinheim (Psychologie Verlag Unien-Beltz) 1986, S. 228-230.

- 27) Jürgen Reulecke : Männerbund versus Familie. Bürgerliche Jugendbewegung und Familie in Deutschland im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts. In : *Mit uns zieht die neue Zeit. Der Mythos Jugend*, hrsg. von T. Koeber, R. Jantz und F. Trommler. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1985, S. 201.
- 28) Friedrich Torberg : *Der Schüler Gerber*. München (dtv) 1999, S. 25.
- 29) Vgl. Mix, a. a. O., S. 255.
- 30) Klaus Mann : Ödön von Horvath. In : *Materialien zu Ödön von Horvath*, hrsg. von T. Krischke. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1970, S. 131.
- 31) クラウス・テーヴェライト (田村和彦訳)『男たちの妄想 I 女・流れ・身体・歴史』(法政大学出版会, 1999年) 165頁。
- 32) 将校(職業軍人)になるための学校システムを、総称して Kadettenanstalt と呼んでおいたが、最上級学校については三種類に分けられるという。陸軍大学, 士官学校, そして予備役将校の訓練学校である。陸軍大学に入るためには、陸軍実科中等・高等学校, もしくはギムナジウムの卒業資格が必要であったが、士官学校の場合は、かならずしもそうした厳しい条件は必要ではなく、ギムナジウムに行かなかった者、あるいは親の経済力不足のためにギムナジウムに行けなかった者にも入学が許されていた。Vgl. Jenneke Oosterhoff : *Die Männer sind infam, solange sie Männer sind. Konstruktionen der Männlichkeit in den Werken Arthur Schnitzlers*. Tübingen (Stauffenburg) 2000, S. 77.

ムージルの経歴を参考までに記しておけば、陸軍実科高等学校を卒業したのち陸軍工科大学に進み、しかし途中で将校教育を投げだし、父親が教授をしていたブリュン工科大学に移り、そこを修了したあとシュトゥットガルト工科大学の助手となった。そして、今度はエンジニアの職を捨て、文学・哲学の道に進むために、1904年に改めてギムナジウムの卒業資格を取りベルリン大学で学ぶ。つまり、ムージルの最初の経歴では人文系の大学に進めなかったのである。われわれがこれから取りあげる『寄宿生テルレスの惑い』は、哲学を専攻していたころに書かれた。Vgl. Thomas Pekar : *Robert Musil. Zur Einführung*. Hamburg (Junus) 1997.

ところで、近代日本における旧制高校出身者(官僚)と陸軍士官学校出身者(将校)の対立は、しばしば指摘されている。旧制高校において最も重要視された西洋的「教養」は軍人には無縁であったし、比較的貧しい出自の者が多かった陸軍士官学校出身者の階級的憎悪の対象でもあった。教育社会学者の竹内洋は、ここに日本型ファシズムの一つの源泉を見いだしている。「軍人エリートと、官僚エリートのような非軍事エリートとの絆が弱くなるにつれ、軍人エリートは草の根農民に、親

教室と寝室

- 近性をうつしていく。五・一五事件（昭和七年）や二・二六事件（昭和十一年）などを契機とする、日本型農民ポピュリズムと結びついた昭和初期のファッション化の背後構造を、こうした文と武、それぞれのエリート学校の補充基盤と教養・身体の乖離にともなう、互いに斥けあうエリート・ハビトゥスにみることができる」。竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、1999年）275頁。近代ドイツにおいては、ギムナジウムと幼年学校のあいだに、このような意味での対立は存在しない。
- 33) もちろん、地元にはギムナジウムがない場合には、遠方の学校の寄宿舎に入ることもあったが、入寮は強制ではなく、町に下宿することも認められていた。たとえば、かつては日本でも人気のあったハンス・カロッサの自伝的学校小説『少年時代の変転』（1928）の主人公は最初、学校の寄宿舎に入るが、同性愛事件に巻きこまれて危うく退学になりかけたあと、古典語教授の家に下宿する。なお、近代ドイツのギムナジウムの制度史については、進藤修一「近代ドイツのエリート教育——『エリート』をめぐる教育改革の100年」『近代ヨーロッパの探求4 エリート教育』（ミネルヴァ書房、2001年）を参照されたい。特にコラム「ギムナジウムの下宿生」（126・7頁）はギムナジウム生の下宿事情を伝えている。
- 34) 第一高等学校の場合、1888（明治21）年から93（明治26）年まで一高の教頭・校長を務めた木下広次によって、生徒同士の自治に基づく寄宿舎制度と、クラブ活動のための「校友会」が作られた。この自治寮という考え方が、のちの旧制高校の性格に大きな影響を及ぼしたことはよく知られているだろう。このことについては、富岡勝「旧制高校における寄宿舎と『校友会』の形成——木下広次（一高校長）を中心に」『京都教育大学紀要』第40号（1994年3月）を参照されたい。
- 35) Mosse: *Das Bild des Mannes*. S. 184.
- 36) ヒトラーが少年教育の改革に興味をもっていたことはよく知られているが、彼の教育論の要点は、反知性主義、反教養主義、体育と実学の重視である。このことについては望田幸男の前掲書251～254頁を参照されたい。望田は『我が闘争』から次のような言葉を引用している。「実際に学問的教養はさしてないが、肉体的には健康で、善良で堅固な性格をもち、欣然とした決断と意志力に満ちた人間は、才知に恵まれた虚弱者よりも、民族共同体にとってはより価値がある」。要するに、学歴なんか無くたって良い性格と真の賢さと心身の健康を備えている（ヒトラーのような）男のほうが、お国のためには役立つ、ということだ。これは、誰も反対できない正しい言説として現在でも通用する。
- 37) 橋本鉦市「近代日本におけるエリート養成の教育過程——旧制高等学校の教養主義教育について」『東大教育学部紀要第』第30巻（1990年）96頁。

- 38) 『飛ぶ教室』では、「公正先生」と、彼のギムナジウム時代の親友であった「禁煙さん」（これも生徒たちのつけた綽名）の再会が一つの山場となっている。生徒たちの活躍で、ふたりはもう一度、親友に戻るのだ。「禁煙さん」は、医者であるのに妻子を病死させてしまったという自責の念から隠遁生活を送っていたのだが、「公正先生」との出会いで、再び母校の校医として出発することを決心する。かくして、再会した「独身者たち」はふたりだけのクリスマスを学校で楽しく過ごすのだった。妻子の死という設定は、『チップス先生』にも見られる。思いがけず「新しい女」と恋愛結婚したチップス先生であったが、すぐに妻は出産のために、生まれた子供もろとも亡くなってしまうのである。独身者チップス先生のために、なかなか手の込んだ設定が用意されていると言えよう。ところで、『制服の処女』の女教師たちが独身であるのは、結婚すれば教師を辞めなくてはならなかったからである。
- 39) 登場する少年たちはギムナジウムの5年生（Tertianer）なので、15歳前後であるはずなのに、思春期の問題は無視されている。もう一つ隠蔽されているのは教育と社会階層の関係である。たしかに、主人公のひとり、父の失業のために奨学金をもらっているという設定になっているが（何しろ、ワイマール末期の話である）、階級じたいは問題になっていない。ギムナジウムと実科学校（Realschule）の喧嘩は、たんなる子供同士の英雄的争いとしてのみ登場するのだ。『坊つちやん』のなかの、中学校と師範学校の衝突（中学生が師範学校生を「地方税」とやじる）は、社会階層の対立を描いたものとして、よく指摘される（因みに、『坊つちやん』と同年に発表された『破戒』の丑松は師範学校の出身である）。ただし、言うまでもないが、彼じしんあまり豊かでない家の出身である風刺作家のケストナーがこうしたことに気づいていなかったのではない。
- 40) Robert Musil: *Die Verwirrungen des Zöglings Törleß*. Hamburg (Rowohlt) 1997, S. 97.
- 41) ムーシルの日記・手紙のなかの発言や伝記的な事実については、アードルフ・フリゼー編（加藤二郎他訳）『ムーシル読本』（法政大学出版局、1994年）を参照させていただいた。
- 42) Walter Jens: *Sadistisches Spiel auf dem Dachboden*. In: *Roman von gestern-heute gelesen 1900-1918*, hrsg. von Marcel Reich-Ranicki. Frankfurt a. M. (Fischer) 1989, S. 55-63.
- 43) *Törleß*, S. 37.
- 44) S. 39.

教室と寝室

45) S. 107

46) S. 127. 「君がバジーニとどんな深い関係になっているか、僕らが知らないとも思っているのか」とバイネベルクに言われたテルレスは「君らほど深くはない」と言いかえすが、バジーニとの「関係」を互いに認めあってしまうことがふたりの決別となる。

47) S. 108.

48) S. 39.

49) S. 41.

Classroom and Bedroom: German School Stories at the Turn of the Century

Rieko TAKADA

The purpose of this paper is to analyze the structure and characteristics of school stories in Germany around 1900, and to examine how the crisis and anxiety of masculine bourgeois self-identity is represented in them. In this article we regard German school stories not only as stories of adolescent crisis, but also as an expression of the degeneration of the liberal educated middle class.

We focus on Robert Musil's novel *Confusions of Young Törleß* (*Die Verwirrungen des Zöglings Törleß*) (1906), which is set in a boarding school for children of the middle class social elite. What this novel describes bears some analogy with the baroquely complicated structure of the school building, an old mansion with many secret dens, hidden stairs, and doors. Teachers can control only in the sunlit classrooms, and don't know what students do in the dark, hidden places and bedrooms. Two of the senior class leaders, whom Musil called in 1937 "the dictator of the day in nucleo", rule in the dark, secret attic of the school. They undermine the moral assumptions of parents and teachers and cruelly dominate that teacherless world.

My analysis attempts to show that what Musil's story prophesied was not just the inhumane orderliness of totalitarianism in the Third Reich, but its father- (or teacher-) less confusion.